

Nhật ký về VIỆT NAM của Chúng tôi

“僕たちのベトナム日記”



はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
会長 安樂 大
(青年海外協力隊鹿児島県 OB 会会長)

鹿児島県青少年国際協力体験事業は、今回で第11回目を迎え、ここに報告書「ニャット(ト) キー ヴェー Nhật ký về ヴィエツ(ト) ナム クーア チュン トイ VIỆT NAM của Chúng tôi」(意味「僕たちのベトナム日記」)を取りまとめました。

この事業は、青年海外協力隊の活動現場に青少年を派遣し、開発途上国で顔の見える草の根の国際協力を実践している隊員の活動を体験するとともに、訪問国の人々との交流を通して、国際交流、国際協力に対する理解を深め、国際性豊かな青少年の育成を目的としています。

今回は、鹿児島市、枕崎市、串木野市、国分市、垂水市、溝辺町との共催で実施しました。各市町村から推薦された11名(中学生6名、高校生5名)と同行者6名(うちマスコミ2名)が、平成14年8月4日(日)～10日(土)、ベトナム社会主義共和国のホーチミン市とドンナイ省タンビン村を訪問しました。

ベトナム社会主義共和国は、2000年にベトナム戦争終結から25年目を迎え、市場経済化、対外開放策を地道に進める「ドイモイ(刷新)」政策が行われています。今回訪問したベトナム最大の経済都市であるホーチミン市は、そうした活気に満ちた賑やかな都市です。ホームステイを体験したのは、ホーチミン市から北東に約70 km、ドンナイ省ビンクー地区のタンビン村。人口7,711人、ザボンの生産が盛んな農村です。村では、たくさんの笑顔が一行を迎え、暖かく包み込んでくれました。

ベトナム社会主義共和国には1995年から青年海外協力隊が派遣されるようになりました。今回の訪問では、活動現場訪問や交流会で4名の隊員の方々と会うことができました。シンクロナイズドスイミング、テニスなどのスポーツ指導員、栄養士という分野で活動していらっしゃる方々です。鹿児島県出身の山下美穂隊員(助産婦)も、ベトナム中部のフエに派遣されており、今回は都合がつかずお会いできなかったのですが、元気に活動中とのことでした。隊員の方々とのお会いを通して、国際協力やボランティアについて考え、学ぶことができました。

この事業に参加した中学生、高校生たちが、それぞれの貴重な体験を鹿児島のために、地球のために活かして欲しいと願っています。また、参加した青少年だけでなく、できるだけ多くの方々と新鮮な感動を共有することで、鹿児島の国際化に貢献できればと考えております。

最後にこの事業にご協力を賜りました多くの皆様に心より感謝申し上げます。

目 次

はじめに

鹿児島県国際協力体験事業実行委員会 会長 安樂 大

ごあいさつ

鹿児島県総務部国際交流課長 六反 省一 1

ベトナムでのスケジュール ～日記風に紹介～ 3

団員が感じたこと

ベトナムからみた日本	竹 原 有佳菜	11
ベトナムがくれたもの	上川路 太 雅	12
ベトナムで学んだこと	岸 田 萌	13
ベトナムの思い出	森 大 樹	14
ベトナムでの生活をふりかえって	宮 下 淳	15
ベトナムで学んだこと	満 留 光 史	16
「心」を感じたベトナム	松 本 康 那	17
ベトナム「友だち」	柴 ひかり	18
ありがとう。ベトナム	松 元 啓 祐	19
第二の故郷	伊 藤 沢 美	20
私の中の宝物	内 村 果 林	21

第11回 鹿児島県青少年国際協力体験事業を終えて 22
団長 安樂 大

同行者が感じたこと

(財)鹿児島県国際交流協会	大 迫 浩 美	24
青年海外協力隊OB会	河 野 理恵子	25
鹿児島テレビ放送	本 田 恵	26
南日本新聞社	谷 口 博 威	27
枕崎市役所	日 高 喜 文	28

新聞記事（南日本新聞、Dong Nai 新聞） 30

資 料

事業概要	42
訪問団員名簿	43

ご あ い さ つ

鹿児島県総務部国際交流課長

六 反 省 一

平成14年度「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の御成功を心からお喜び申し上げます。

この体験事業は、国際性豊かな人材を育成すること等を目的として全国でも先駆的に行われ、今回で第11回を迎えられておりますが、県としても21世紀新かごしま総合計画の中で目指している、「アジア地域をはじめとする世界各地と相互の理解と協調のもとに、様々な交流が進められ、我が国の南の拠点として、人、物、情報等が行き交う交流連携で伸びゆく魅力あふれる南の拠点かごしま」の形成に資する事業として高く評価しているところです。

今回は、昨年に引き続きベトナム社会主義共和国を訪問し、青年海外協力隊員の活動現場を視察したり、孤児院訪問、ホームステイやホストファミリーとの農作業などを通じてベトナムの皆さんと交流され、国際交流や国際協力に対する理解を深めることができたと思います。

事業終了後の県出納長表敬の際の団員の皆さんのお話で、文化や言語、生活習慣など、日本とは異なった環境の中で、苦労したことや楽しかったことなど思い出深い貴重な体験をされたこと、また、将来青年海外協力隊に参加したいという感想などもお聞きすることができ、たくましくなった皆さんを頼もしく感じました。

今回のこの貴重な体験を、皆さんの今後の人生や社会生活に活かしていただくとともに、その体験をご家庭や学校、あるいは地域社会でお話ししていただき、多くの人に伝えていただきたいと考えております。

最後に、この事業を実施された鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会及びこの事業の実施に当たり御支援・御協力を賜りました国際協力事業団並びに青年海外協力隊の皆様にご心から敬意を表しますとともに、この事業の今後一層の充実、御発展を祈念いたします。

第11回（平成14年度）鹿児島県青少年国際協力体験事業

■スケジュール

日 時	時 間	内 容	宿 泊
8月4日 (日)	8:00 鹿児島空港	結団式@国内線ターミナル3階B室(7:45集合)	サイゴン プリンスホテル
	9:45 鹿児島発	JA802 10:25 福岡着(昼食)	
	14:00 福岡発	KE784 15:00 釜山着	
	16:50 釜山発	KE817 17:50 ソウル着	
	19:30 ソウル発	KE681 23:00 ホーチミン着(タンソニャット空港)	
8月5日 (月)	12:00	ホテル出発 貸切バスでDong Nai省へ	ホームステイ
	13:30	歓迎式(Bien Hoa市孤児院にて) 「人民委員会と孤児院による合同歓迎式」 ・歓迎スピーチ、ホームステイプログラムの説明 ・鹿児島青少年の出し物(20分間)・孤児達との交流	
	15:30	ホームステイ先、Tan Binh村へ向けて出発 途中、献花と参拝	
	17:00	Tan Binh村到着 ホストファミリーと対面式	
8月6日 (火)		ホストファミリーと農作業など(Tan Binh村)	ホームステイ
8月7日 (水)	6:30	Tan Binh村人民委員会に集合 旧戦地へ出発	ホームステイ
	8:00~9:30	地域内の旧戦地「D地区」を見学	
	10:30~16:00	ボートで「オ島」に渡り、昼食、伝統的青年的ゲームなど	
	17:00	Tan Binh村に戻る	
8月8日 (木)	6:30	Tan Binh村人民委員会に集合 ホーチミンへ	ホームステイ
	8:30	スイミングクラブ訪問(青年海外協力隊活動現場) *舩田野子隊員(12年12月派遣・シンクロナイズ)	
	10:30	チョーライ病院視察訪問(青年海外協力隊活動現場) *柿沼恵美子隊員(12年7月派遣・栄養士)	
	13:30	瀬戸口企画調査員からJICA※事業の説明	
	17:00	Tan Binh村に戻り、ホストファミリーと夕食	
	19:00~22:00	交流会(出し物披露など)・意見交換会	
8月9日 (金)	9:00	人民委員会集合・ホストファミリーとのお別れ	機内泊
	11:30	昼食(ホーチミン)	
	18:00	ホーチミン市で市内視察・戦争記念館・買い物	
	19:30	青年海外協力隊員との懇談会(JICAベトナム南部支所)	
	21:30	青年海外協力隊員との夕食会 空港へ向けて出発	
8月10日 (土)	0:10 ホーチミン発	KE682 7:20 ソウル着	
	10:00 ソウル発	KE785	
	11:30 鹿児島着	解団式「ただいま!」@国際線到着ロビー	

7月 **13日** (土) **27日** (土) **28日** (日)
事前研修で・・・



ベトナム出発まで2回の研修。ドキドキしながら11人の中学生・高校生が集まった。一人一人自己紹介をしながら、だんだんと仲良くなった。ベトナムの留学生ロイさんたちが先生でベトナム語の勉強。“こんにちは”は「Xin Chao : シンチャオ！」ベトナムに行くんだ・・・という実感がわいてきた。

8月 **4日** (日)
結団式



多くの人からたくさんの言葉をもらった。
安楽団長からは「気合い。前向き。自然体でいこう！」
団員一人ずつ、ベトナム語で挨拶。最後に、ベトナムでのホームステイ先の写真を渡され、ほんの少しだけベトナムに近づいた。でも不安がいっぱい……。ベトナムへ向かって出発！！



Nhật ký về VIỆT NAM của Chúng tôi

8月 5日
(月)

孤児院での出会い



孤児院ではたくさんの子供達が待っていてくれた。ベトナム会話帳を使って話す。まず感じたのは「言葉の壁は厚いな〜」ということ。でも、めげずにトライ！満留光史君もなんとか通じてピース！

事前研修で何度も練習した出し物を初披露！まずは松本康那さんのソーラン節。はっぴで一生懸命踊る姿にみんなで掛け声、手拍子で盛り上がる。孤児院の子達からも日本語の歌や踊りのプレゼント。最後に「また会おう」って握手したら、涙をためた目でうなずいてくれて、感動。

ホームステイ先 タンビン村へ



田んぼが続き、牛を引きながら人が歩いている。のどかだな。その横を走るたくさんのバイク。ほとんどが、二人乗り、三人乗りでヘルメットはない！！

ホストファミリーとの対面



村に着き、いよいよホストファミリーと会う。名前を呼ばれ、立ち上がりホストファミリーと握手。どきどきしながら、大きな荷物を抱え、家に向かおうとするけど、乗り物はバイクだ！この荷物、どうするの？バイクを運転する人との間にスーツケースをはさみ、後ろで支えて乗るとはびっくり！これがベトナム流！？

一日目の夜。緊張したのは、つかの間。やさしい家族に囲まれて内村果林さんもこんなにリラックス。

Nhật ký về VIỆT NAM của Chúng tôi

8月 6日 (火)

タンビン村でホストファミリーとの一日



タンビン村は、ザボンの産地として有名なところ。ホストファミリーのザボン畑の草刈りを手伝ったり、朝から市場に行って買い物に付き合ったり・・・。

岸田萌ちゃんの家は村のカフェ。カフェにはビリヤード台があり、またアオザイの仕立て屋さんもしていて忙しそう。萌ちゃんもコーヒーの入れ方を教えてもらってお手伝い。しっかりベトナムコーヒーを味見することも忘れません。味は苦めのコーヒーと、練乳の甘さが混ざっておいしいです。

松元啓祐君と宮下淳君の家はお向いさん。淳君はホストブラザーと得意のバスケットボール、啓祐君は近所の子供を集めて折り紙教室。

8月 7日 (水)

旧戦地の見学



バスに乗り、パートナーと一緒に旧戦地の見学。ベトナム戦争の旧戦地は山の中にあり、こんな所で戦っていたんだと知った。会議をする部屋、台所、全ての部屋が地下にある。屋根は空の敵から見つからないように葉っぱを重ねて作っている。いろんな説明を聞いて、ここが戦いの現場だったんだと実感すると怖くなってきた。「生きるためにこんなことまでしなきゃいけなかったんだ」と知り、戦争に対して憤りや悲しみを感じた。

観光地「オ島」での交流会



←生春巻。オ島で食べた。中にレタスとえびの具を包んでタレにつけて食べる。巻くのが難しい！！



船で移動し、観光地の「オ島」へ。突然、台風のような大雨。今ベトナムは雨季で、バケツをひっくり返したような雨が降る。(でも、すぐに止むことが多い) 今日にはなかなか止まず、外でのスポーツは中止。室内での交流会になった。ベトナムの人達はカラオケ大好き！次々と人が出てきて、マイクを離さず歌ってる。こっちは負けずに(ちょっとおされ気味だったけど)「島唄」や「翼をください」など披露した。

Nhật ký về VIỆT NAM của Chúng tôi

8月 (木)

ベトナムで活躍する青年海外協力隊に会った



ホーチミン市内で活動している青年海外協力隊を訪問した。一人目はシンクロナイズドスイミングを教えている舩田野子さん。二人目は、チョーライ病院で栄養士の仕事をする柿沼恵美子さん。会った感想はとにかくかっこいい！！なんか自信に満ちていて、違う国で現地の言葉を使って指示する姿にほんと憧れた。将来、こんな風になれたらいいな。

タンビン村、最後の交流会



ホームステイ最後の日。家族と一緒に交流会の会場へ。たくさんの人が集まり、熱気ムンムン。

伊藤沢美さんの日本舞踊にたくさんのカメラのフラッシュ。

みんなで歌う島唄ももう最後だね。プログラム最後はおほら節。ベトナムの人も飛び入り参加し、狭い舞台上がって一緒に踊った。ほんとに今日が最後のホームステイ？

8月 9日 (日)

ホストファミリーとの別れ



朝、9時にいつもの集合場所に集まる。泣きそう。やばい・・・って言いながらも、リーダーとして村への感謝の気持ちを伝える上川路太雅くん。胸にこみ上げてくる気持ちを抑えながら、家族の手を握りしめる。とうとう誰かが泣き出す。みんなつられて次々と涙、涙。竹原有佳菜さん、柴ひかりさんも指さし会話帳を使って最後の言葉を伝える。出発時間になり「ヘンカップライ！また会おう」と繰り返しながらバスへ。同じように涙するホストファミリーに手を振る。また、来るからね！！

戦争記念館見学



ホーチミン市内の戦争記念館へ。通訳のヤンさんの話を聞きながら写真やたくさんの武器をみて絶句。人間ってこんなにむごいことができるの？恐くなる。写真にホストファミリーの弟みたいな子が写っている。さっきまでいた村にもこんな歴史があったなんて信じられない。

Nhật ký về VIỆT NAM của Chúng tôi

市内見学と青年海外協力隊との懇談会



ホーチミン市内で活躍している青年海外協力隊員4名とJICA事務所の瀬戸口さんを招いて夕食を取りながら懇談。ベトナムの音楽が流れるおしゃれなレストランで少し緊張。森大樹くん、宮下淳くんも協力隊員から活動について、苦労していることや嬉しかったことなど、たくさんのことを聞いた。楽しい事ばかりではないみたい。でも隊員の目は輝いていた。ベトナムの最後の夜が終わり、ホーチミンの空港へ。

8月 10日 (土)

鹿児島空港へ到着



空港に着いた。疲れた気はするけど、もうみんなとお別れだと思ったり悲しかった。まだ、みんなと一緒にいたい。まだあんなこと、こんなことしたかったと思うけど悔いはない。ホントにこの夏は最高だった。

団員が感じたこと



ベトナムからみた 日本

鹿児島女子高等学校 1年

竹原 有佳菜

日本は「先進国」と呼ばれ、豊かな国だと言われている。確かに、みんな学校にも行けるし、住む家だって、水だって豊富にある。でも私は、そんな生活を当たり前のように過ごしてきたため、日本は豊かな国だと言われても、いまいちピンツとこなかった。

しかし、ベトナムに行き、日本は豊かすぎると感じた。一番、日本の豊かさを実感したのは、チョーライ病院を訪問した時だった。チョーライ病院は南部で一番大きい病院ということで、たくさんの患者さんたちが集まるということだった。そこで、私たちは、院長先生のお話と柿沼さんのお話を聞いた。話を聞くとところによると、病院のベッド数1100に対し、入院している人は1800人もいるという。しかも、入院している人は皆、最も良い治療を受けられるのではなく、支払い可能な金額に応じて薬を使い分けるということだった。さすがにこれは驚いた。日本では、考えられないことだった。日本の病院は誰もが最善の治療を受けることができる。もしも、日本でチョーライ病院のようなことになると大問題になるだろう。まだまだ、ベトナムには病院が少ないし、医療機器も充実してない。その点から考えると、日本はやはり恵まれている国だと思う。

でも私は、日本とベトナムを比べたときに日本に欠けているものを見つけた。それは、何ととっても心のあたたかさだ。とにかく、ベトナムの人の心はあたたかく、フ

レンドリーだった。日本にも、そんな人はいる。けれど、ベトナムの人は誰もがあたたかかった。日本人にはない人のあたたかみがベトナムにはあった。ベトナムのホストファミリーは、いつも笑顔であふれていた。お腹を痛めた私に、冷たい水ではなく、いつも火で温めた水をくれた。蚊にかまれると、家族みんなに「大丈夫だよ。心配しないで。」と言われ、かかないよう注意された。このようなことを祖母に話すと「昔の日本みたいだねえ」と言った。私がベトナムにいた5日間の間、人のやさしさに触れてばかりだった。

今回のこの体験事業は、一言で言うと「よかった」。改めて、日本を見つめることが出来、また自国について考えさせられた。きっとこれは、日本にいたら気づかないことだろう。しかも、たった3枚程度じゃ書ききれないほどの体験を私はした。ベトナムと日本。比べてみるといろんな違いを発見できた。どっちが勝っているというわけじゃなく、それぞれ良い部分も悪い部分もある。このことを発見できた私は幸せ者だ。



ベトナムがくれたもの

鹿児島玉龍高校 1年
上川路 太雅

私は本当に参加して良かったと思っています。

言葉の壁、ベトナムの食文化、ベトナムの人の性格、ベトナムの生活、たくさんのことを学びました。

私の父は青年海外協力隊でした。だから幼いときから協力隊に興味を持っていました。そして中学生の頃から海外に行ってみたくて思っていました。そんな思いから私はこの企画を知ったとき、すぐに応募しました。

行きの飛行機の中、友達とベトナムの思いをふくらませていました。しかし、逆にホストファミリーのところへ行くことには不安が大きくなっていきました。やっぱり言葉が違うからです。

二日目、いよいよホストファミリーとの対面の日でした。孤児院で自分のパートナー、フーンさんに会いました。初めて会ったとき、強く握手をされ、「よろしく」と言われました。その時、自分の中にあった不安はやわらぎました。

しかし、言葉の壁は思った以上に高いものでした。ベトナム語は発音記号がつくだけであって、すごく発音が難しかったです。最初はあいさつ（シンチャオ）でさえも伝わりませんでした。中学校で習った英語の文法はなかなか使えました。が、こみいった話しは当然できません。街でフーンさんの友達の女性に会ったときも話したい話があるのに話せませんでした。このときほど英語の勉強をしたと思ったことはありません。

でもこの壁ののりこえ方が分かった気がします。それは「伝えたい」「話したい」という『心』です。言おう言おうとしていれば伝わりました。それだけでも絶対日本では味わえない貴重な体験でした。

そんな感じで話しながらのフーンさんとの生活は本当に楽しかったです。自分の知らない果物がたくさんあり、どれもおいしかったです。ベトナムはバイクがものすごく多かったです。フーンさんとバイクに乗るのはすごく楽しかったし、バイクは本当に気持ち良かったです。バスの中では、フーンさんはいつも歌っていました。ベトナムの人は陽気だとは思っていましたがフーンさんは本当に陽気でした。笑顔が絶えませんでした。フーンさんとの思い出は絶対に忘れません。というより忘れられません。

私の家は以前ショートホームステイをしていました。その時私はまともに話せませんでした。だから行く前は不安でした。でも今は違います。ベトナムに行って自分に自信ができました。そしてベトナムでの一週間の生活は私の考え方、生活を変えてくれた気がします。

本当はまだ具体的に自分が得たものが何かが分かりません。今は思い出にひたっているだけです。これから得たものを見つけ、そして自分の生活に生かしていきたいです。また周りの人に海外協力の大切さ、楽しさを伝えていきたいです。



ベトナムで学んだ こと

枕崎中学校 3年

岸田 萌

私は、この報告書を書くに当たり約2時間近く書くことがまとまらず何度も文字を書いては消しました。書こうとするたび、色々な思い出が次から次へと頭の中に鮮明に浮かんでいきました。この六日間のベトナムは私にとって、忘れがたい貴重な体験です。

私は、ベトナムという国にはほとんど抵抗なくスンナリと入り込めました。しかし、今思うと1秒1秒その一瞬をこなすことに精一杯で感っていたり深く考えたりする余裕がなかったように思えます。だから、日本に帰って来てから振り返ると理解できたりすることが多々あります。

たとえば、私がベトナム人を初めて見た時の印象は、少し近よりがたいカンジだったのですが、ホームステイでベトナムの人々の家庭へ入るとそのようなことはまったくなく、やさしく、穏やかな人達でした。今、考えると私はベトナム人は戦争という重たいものを背おっているからきっと近よりがたいカンジなのだろうと、自分勝手な先入観を持っていた気がします。

また、このベトナムへ行って私の中でかわった印象がもう一つあります。それは、青年海外協力隊のことです。私の中で協力隊のイメージは、発展途上の国へ行き、井戸水などを掘ったり、看護を中心とした仕事をするのだとばかり思っていたのですが、私が現地で会った協力隊のみなさんは、シンクロやテニス、新体操などスポーツを中心に教えていました。

私たちは、協力隊の舩田さんが活動するシンクロを見学させていただいたのですが、それは私の中の協力隊のイメージをすべて覆すものとなりました。舩田さんが活動中に見せる表情や目つきは、私たちのよく知る学校などの先生の見せるものとよく似ていました。

私が一方的に抱いていた協力する人の見える表情というよりも人を育てる表情だと思いました。このことにより、私の将来を決めるための視野が広がりました。このことは、まだ漠然としかない自分の夢をかたちにする大切な要素の一つになったと思います。

今でも、ときどき思い出したり考えることがあります。それはベトナムでのいろいろな体験などのことであったり、一緒に日本からベトナムへ行ったみんなのことであったりしますが、やはり一番思うのはホストファミリーのことです。今、思うといきなり外国からきた私をどうしてあそこまで親切に温かく迎えてくれたのかとても不思議でなりません。もし、そんなことをホストファミリーに聞いたら、逆になぜそんなことを聞くのかと不思議がられるかもしれませんが、やっぱりわかりません。きっとそれがベトナム人にはあって私にはない心なのだと思います。今度ベトナムへ行く時はその心をきちんと自分の中に見つけて行きたいです。

最後にこの事業にかかわったすべての人へ、私にこのようなすばらしい体験をさせて頂いたことを心から感謝しています。

団員が感じたこと



ベトナムの思い出

枕崎中学校 1年

森 大樹

待ちにまった日がやってきました。やっとベトナムに行けるのだと思うと不安と期待で胸がいっぱいになりました。

ホームステイ先はバイクのパーツを売っていたりビデオのレンタルをしている所だった。

家は床がタイルで思ってたよりきれいでした。

でも、トイレは水洗じゃなくて、桶で水をくんで流すようになっていました。最初は、ビックリしたけど、帰るころにはなれました。シャワーは、水で冷たかったけど暑かったので、ちょうど良かったです。パートナーや家族は、とてもやさしかったです。

食事は、テーブルがあるのに、床で食べていました。ご飯は、僕の口には合わなかった。とくに、フォーと言う、めん類が合わなかった。

パートナーとは、バスケットをしたり、ベトナムの遊びを教えてもらったりして遊んで楽しかった。ベトナムの子供たちは、お金がなくて自分達で作ったおもちゃで遊んでいました。そんな、ベトナムの生活にくらべて僕達はぜいたくだなと思いました。

それから、一番苦労したのが言葉でした。発音がむずかしくて、つうじてなかったりして苦労しました。でも、指さし会話帳を使うとうまく通じたりして、ほっとしました。

そして、戦争記念館に行きました。戦争記念館には、戦争に使われた武器が展示されていたり、赤ちゃんのホルマリン漬がすごく印象にのこりました。枯葉剤で体に変形した写真などがあり、とてもかわいそうと思いました。

ベトナム戦争は、ベトナムに大きな傷あとと、悲しみを残していったかもしれません。

日本もこの戦争が起きないように、平和な国を僕達が守っていかなければならないと、思いました。

そして、青年海外協力隊の人の話を聞くことができました。スポーツ関係の隊員で卓球やシンクロなどを指導している方でした。色々な話を聞いてとても、大変な仕事だと思いました。

あっという間に一週間が過ぎました。僕は初めての外国でたくさんの不安があったけどなんとか帰る頃には、ベトナムの生活にもなれ、この体験事業に参加してよかったです。ベトナムで体験し学んだ事を将来の自分に生かしていけたらと思う。



ベトナムでの生活を ふりかえって

枕崎中学校 1年

宮下 淳

ぼくはベトナムに行く前と行った後では全然イメージがちがいました。行く前のイメージではおふろは家の外にあると聞いていたし、トイレがない家や家の外にあるトイレ、もちろん水洗ではないと思っていました。しかし、ぼくの思っていたイメージもベトナムにはあるかもしれないけど、ぼくたちがとまったドンナイ省のタンビン村ではとても裕福な家が多くて、貧富の差も確かにあるけれど、ぼくのとまったステイ先では、家の中に水洗トイレがあり床もタイルでおふろもちゃんと家の中にあいました。ホストファミリーの人々はとても心があたたく感じられました。それはぼくがふろに入る前に水だったからつめたい表情をするとぼくのパートナーのトンはお母さんに言って水を火であたためて、お湯にしてくれました。それだけではなくて、トンは自分のお金をつかってベトナムにしかない食べ物を買ってきてくれました。

ぼくのとまったステイ先の一週間は日本とはまったくちがうものでした。朝は毎日市場へ出かけます。ぼくの家は毎日、夜の8時ぐらいになると近所の人々がぼくの家へ遊びにきます。多くて15人ぐらいは来たことがありました。ぼくの家はねるのがだいたい夜の11時ごろで起きるのが5時ぐらいの毎日でした。

それからぼくはベトナムにきて、気づいたことや思ったことがいくつかあります。ベトナムの人々はかみの毛がぬけている人があんまりいませんでした。それからベトナムでの食事は絶対に床で食べることや、ベトナムの子供のへいきん身長がかなり背が低いということだ。ぼくのパートナーは日本になおすと中学三年生なのに身長が145cmぐらいであ

った。実際にそういう人が意外と多かったのです。

ベトナムの高校生たちは少しは英語がしゃべれたからぼくも少しだけ英語をしゃべりました。一番ぼくがベトナムでつらかったことはやっぱり言葉の壁が厚くてぼくがベトナム語で話しても、発音が悪かったらしく通じなかったことがあります。それで一番役に立ったのが、事前研修でもらった指差し会話帳でした。ぼくはそれを使ってパートナーやホストファミリーたちと指を差しながらいっぱいに使いました。たぶん指差し会話帳が無かったら、ぼくはかなり困っていたことだと思います。最後にぼくは、パートナーと家族におみやげをあげました。ホストファミリーはとっても大喜びでした。日本にしかないものをあげました。最後の日にはパートナーからぼくがおしえたおりづるを作ってくれました。その時は本当にうれしかったです。

実際に青年海外協力隊の現場も見て、協力隊の人々はとってもいきいきしていて、とってもあこがれました。そしてぼくは、今自分ががんばっているバスケットボールの協力隊があることに気づき、自分も将来、バスケットボールの協力隊になってみたいと思いました。

ぼくがこの一週間ベトナムにいて、やっぱり日本とはちがう生活もできて、日本ではない光景も数多く見られました。一週間とは短い時間だったけれどいろいろなことを一つ一つがとってもいい勉強になったのだと思います。これからもこの事業で学んだことをいろいろなことに役立てていきたいと思っています。

団員が感じたこと



ベトナムで学んだこと

八代工業高等専門学校 1年

満留 光史

僕が、この事業に参加することになったきっかけは、母の勧めでした。今、八代高専に寮から通う僕には、こういう事業と出会うことがありませんでした。そこへ、母から手紙が届き、協力隊に興味のあった僕は、参加してみることにしました。参加を決め、約1ヶ月が過ぎ、この事業の1次研修がありました。

一緒にベトナムに行く方々や、仲間との初めての顔あわせでした。それから2週間がたち、1泊2日の2次研修が始まりました。共に食事をし、言葉の学習をし、しだいに打ちとけ、皆と仲良くなりました。それから1週間、いよいよベトナムへ出発でした。大きな不安と膨張していく緊張で、胸はいっぱいでした。

僕が、このベトナムでの研修で得たいと思っていること、それは具体的には、ありませんでした。しかし、行って、見て、聞いて、感じたことを、日本へ持ち帰り、多くの人々に伝えることができればいいなあと考えていました。

僕たちの生活する村へ到着しホストファミリーの人たちと過ごした4泊5日は、とても短かったけれど楽しく過ごせたと思います。しかし、それ以上に心に残っているのが、街にあふれるホームレスや、物売りをする子供たちの姿です。また、戦争記念館で見た多くの戦争の写真です。そのむごさ、悲しみは、僕の心にのしかかりました。目の覆うような多くの写真たちは、何かを伝えようとしているようでした。戦争の怖さを知りました。

僕の中では、メインの協力隊訪問では、スポーツ隊員として派遣される隊員がいることへの驚きでした。今までの僕のイメージとは異なり、多くの職種がある協力隊に驚きました。そこで活躍する隊員の皆さんは、生き生きとし、輝いていました。見ているだけで、力がわいてくるようでした。目標があるということって、本気に素晴らしいことだと思いました。そして、そうなりたいと思いました。自分も協力隊に参加したいと思えました。

ベトナムへ行き、感じ考えたことは多くありました。1つ1つ振り返ると楽しいこと、悲しいこと、たくさんありました。戦争について、みつめ直すことができたこと、協力隊への憧れを抱くことができたこと、どれも、ベトナムで学んだことです。



「心」を感じた ベトナム

国分市立国分南中学校 3年

松本 康那

日本とは、言葉も文化も違うのに、なぜだかすんなりととけ込むことができた、ベトナムの生活。その理由は、周りのベトナムの方々がとても温かい心を持っていたからだと思う。

初めてホストシスターに会った時は、日本の友達も一緒にとても気楽に、お互いのパートナーと交流することができた。しかし、皆と別れ、各自ホームステイ先へ着くと改めて言葉の壁、文化の違いを思い知った。パートナーのクウィンさんは英語ができたので、指さし会話帳も使って、なんとか会話ができる。お風呂やトイレなどは思っていたよりずっときれいで、戸惑うことなく使うことができた。最初、朝5時に起きると聞いた時には、「絶対無理」と思っていたが、本当にすぐに慣れてしまった。行く前の不安などがすぐなくなりました。本当にベトナムの生活は私に合っていて、ここが外国、ベトナムだということをおぼえてしまうほどにとけ込むことができました。

私が驚いたことの一つに、ベトナム人は親せき、近所の人々との関係がとても深い。私がホストファミリーの皆さんに日本の踊りや歌をひろうする、と言ったときに、私が準備している数分間の間に、30名近くの近所の人々が集まっていた。それもベトナムではもう遅い時間なのに。この光景にはとても驚いた。でもそれ以上に、皆さんが私のために集まってくれたことは本当に本当にうれしかった。

ベトナムの人は、本当に温かい。細い木の

橋を渡る時に私が戸惑っていると、何も言わずに手をさし出してくれる。ベトナムの人々も、私達と同じように言葉の違いの悩みはあるはずなのに、どんどん話しかけてくれる。この心の温かさは、日本には少ないと思う。物もたくさんあり、何一つ生活に不自由のない国なのに。私は、日本にもこの心はたくさんあって欲しいと思う。

そして、家族がとても仲が良い。ホストファミリーの家には、家族全員で撮った写真がたくさん飾ってあった。家族みんなで協力していて、これこそ理想の家族像だな、と思った。

別れの日。昨夜は遅くまでクウィンさんと悔いのないよう、ずっと話をしていた。別れするとき、泣かないと思っていたのに、涙があふれ出て止まらなかった。内緒で書いていた手紙を渡した。つたないベトナム語で書いた手紙だったが、クウィンさんはそれを見て私を抱きしめてくれた。2人でたくさん泣いて「絶対に、また会おう」という約束をしてタンビン村をあとにした。バスの中でも涙は全然止まらなかった。

私はこの体験を、できるだけ多くの人に話して行こうと思う。ベトナムに対して悪い印象を持っている人に、話したいと思う。ベトナムは、温かくて、忘れていた“何か”を見つけることができる。体験に参加できて良かった。ありがとう、第二の故郷、ベトナム。

団員が感じたこと



ベトナム「友だち」

垂水中学校 2年

柴 ひかり

垂水中学校に転校して間もなく4月のある日、父が一枚のチラシを持ってきました。「ふれあいの旅 inベトナム」のタイトルが目に入りました。まだ、新しい学校に慣れるのがやっとの自分にとって最初はベトナムに行くことなど考えられないことでした。でも、父と母にすすめられてるうちに行ってみようかな、とだんだん思いはじめました。それは日本と同じアジアにある他の国の文化を知りたいという気持ちと、ホームステイというのもいい体験ができると思ったからです。そのとき立てた目標は「友だちをつくる」ことでした。世界の人と仲よくなるということは、平和にもつながると思いました。ベトナムについて、いよいよパートナーとの対面の時、私がパートナーがどの人か分からず、キョロキョロしていると、「シバアッ」と大きな声で呼ばれました。びっくりふり返ると、パートナーが手をふっていました。パートナーはノワオの高校生で名前はニューさんといいました。初めは何を話しているのか分からなかったけれど明るく人なつこいパートナーが、いっしょうけんめい話しかけてきてくれたので、ドキドキしていた私も安心して、すぐにうちとけることができました。ステイ先につくとニューさんの弟と妹がいました。弟は8才で小学生のミン君、妹のユンさんは私と同じ年でした。初めのころミン君は、私が話しかけてもかくれたりして、なかなかコミュニケーションがとれず私にとって、すごく残念でした。この先、うまくやっていけるだろうかと不安になり、日本に帰りたいたいという気持ちでした。どうにかして仲よくなると思って、徳之島にいた時に覚えた三味線をベトナムに持って行ったので、三味線をひいて交流をしました。ほかにボールあそびや、日本から持ってきた折り紙を教えたり、ベトナム料理をいっしょに作らせてもらったりしているうちに、しだいに仲よくなってきて毎日がとても楽しくなってきました。ある日、ニューさんが運転するバイクのうしろに、いつものように乗っていると近所の人たちや子供たちが、「シンチャオ(こんにちは)」「Hello!」など元気よく声をかけてきました。返事をすると、とても喜んでくれました。それから、私がベトナム

に来て気付いたことは、ベトナム人は、とても人なつこくて、無邪気だということです。私がおどろいたりおかしくて大笑いすると、「おやっ?おどろいている。」「あんなに笑ってるよ。」という風に私のことを指さして笑ったりします。日本では人に指をさすのは失礼になるといいますが、ベトナムでは一つのコミュニケーションなので、私はぜんぜん悪い気分にはなりません。滞在中、だんだんみんなと親しくなってくると、ベトナム語の会話の内容がなんとなく分かるような気がしてきました。すると、ますますベトナムの人達と親しくなれるようで、うれしくなりました。いよいよ最後の夜となりました。あんなに話しかけても、かくれたりしてたミン君が、「帰らないでほしい」という風に私のズボンのすそを引っぱってきました。私は、ここまで仲よくなれたかと思うと、すごくうれしくて涙が出そうでした。その夜は、おそくまでみんなとボールあそびをしました。言葉はうまく通じ合わなくても、こんなに楽しく、いっしょに過ごすことが、できるのだから知り合えば世界のどの国の人とも友だちになれるんだろうなと思いました。あと一日でもいいから、いっしょに過ごしたいと思いました。しかし別れの日が、とうとうきてしまいました。私とニューさんは手を握り合って泣きました。ふと、ミン君を見ると目に涙をうかべて、キュッと口を閉めていました。私は悲しいという気持ちから、なぜかとてもうれしいという気持ちに変わっていました。いっしょに笑い、いっしょに泣く。それこそ本当の友だちなんだということを実感しました。住んでいる国は違って心と心は近くにあります。私が今回ベトナムに行って印象に残ったことは、ベトナムでは人々との付き合いが深いことです。ニューさんの家にも近所のいろいろな人たちがいつも遊びにきたり私に会いにきたりしました。またベトナムへ行ってよかったと思ったことは一番の目標だった「友だちをつくる」ことも達成でき、まだまだ知らない皆さんの世界でも、きっと友達をつくることができる。という自信がついたことです。この感動を私のまわりのいろいろな人に伝えていこうと思いました。



ありがとう。 ベトナム

加治木高校 1年
松元 啓祐

僕は、今年八月四日から十日まで、国際協力体験事業でベトナムを訪問した。僕がこの事業に参加した理由は、海外のいろいろな国へ行き、外国の方と友達になり、いろいろな話をして視野を広げたかったからだ。ベトナムへ行く前は、慣れない地でうまくやっつけられるかという不安と、何事も積極的にやろうというやる気が入り混じっていた。

僕がこのベトナム滞在中で一番心に残ったことは、ホームステイだった。ホームステイは四泊五日で、僕たちは一家庭に一人ずつだったので最初少し心配だった。ホームステイ先の家までは、バスが止まった所からバイクの二人乗りだった。最初は慣れずに大変だった。

ホームステイ先の家についた時、こちらからあいさつをしたら、笑顔を返してくれたので安心した。ホームステイ中の会話は、予め日本で少しだけベトナム語を勉強していったが、持って行った指さし会話帳を使ったり、英語やジェスチャーを使っておおまかな所は理解できた。特にホームステイしたタンビン村の人々はいつも笑顔で、こっちも自然と笑顔になり、言葉は少々通じなくても心を通い合わせることができるのだと実感した。僕がホームステイをしていて、最も多くの時間を近所の子供たちと遊んでいたような気がする。子供たちはとても人なつっこくて、僕も一緒に遊んでいて楽しかった。子供たちの笑顔はとても新鮮で、みんな本当にかわいかった。それと、驚いたことは近所どおしで普通に家に入ったり

したりすることだ。こういうことが習慣づいているのは近所どおしの結びつきが強く、人々の心の中に人類みな兄弟だ、という考えがあるからだろう。しかし、長いようで短かったホームステイも終わり別れの時がやってきた。僕はバスが出るまでは笑顔で手を振り続けていたが、バスが発車してからステイ先で多くの人と出会ったことや、家族のみなさんなどから親切にしてもらったことや、子供たちと遊んだことを思い出したら、自然と涙が流れてきた。このホームステイのことは一生忘れないだろう。

また滞在中に、ベトナム戦争博物館へ行った。そこには目をおおいたくなるような悲惨な写真ばかりで、戦争はこんなにまで人を変えてしまうのか、なぜ同じ人間同士で傷つけ合うのかと思い、戦争は本当に恐ろしくまた悲しい事だと感じた。戦争の悲惨さを忘れてはならず、二度と戦争を行ってはいけない。と思った。

今回のベトナム滞在中で、多くの貴重な体験をすることができた。このような体験ができたのは両親のおかげであり、心から感謝したい。現在、世界各地では紛争、内戦が起こっているが、誰もがタンビン村のみなさんのように、いつも笑顔で相手のためという優しい心を持っていれば、紛争や内戦もなくなり世界平和につながると思う。そして僕自身もこの事業で経験したことを生活に活かしたい。



第二の故郷

加治木高校 2年

伊藤 沢美

ベトナムという地から帰ってきて早3日。思い出すのは、ベトナムの南部に位置するタンビン村で過ごした日々ばかりだった。

さまざまな期待と不安を胸に、十日前、私達は日本を後にした。孤児院で私のパートナーであるトウさんと出会い5日間のホームステイが始まった。多少、言葉の壁は感じたものの、私にとってホームステイは本当に最高なものとなった。日本より生活水準の低いベトナム。お風呂はバケツに水を汲み体を洗い流す程度、夜になると数匹ものヤモリが天井を這っている。そんな生活も私にとってはいつしか自然になっていた。もちろん経済大国の日本に比べるとそこでの生活は不便そのものだったかもしれない。しかし、私は不自由だと感じたことは一度もなかった。むしろ、ベトナムの生活こそが、人間の本来の姿を象徴しているかのように思えた。一日一日に、中身がぎっしり詰まっているのだ。日本がチクタクと時の流れを刻んでいる中で、ベトナムでは時の流れではなく、自然の流れが存在しているように思えた。農業をして、料理の手伝いをして、遊んで、そんな普通のことがすごく楽しかった。5日間、村にいた中で入ってこんなにも温かいんだって心の底から思った。たったの5日間。けれど私にとっては、これ以上ない5日間だった。私はこの村の人々の笑顔を忘れない。それと同時にもう1つ忘れてはいけないことがある。数多くのベトナム人が犠牲になった戦争。戦争記念館へ行って、

ベトちゃんドクちゃんのような赤ちゃんのホルマリン漬けを見た。ベトナム人の首を切り落として笑っているアメリカ兵を見た。何の理由もなく村の全ての人々が虐殺され死体がゴロゴロと横たわっている写真を見た。もし、タンビン村の人々が全員虐殺されたら一。恐かった。私は、タンビン村の人々の笑顔が血に染まるような戦争を二度と引き起こしてはいけないと思った。村の人々の笑顔の裏には、こんな残酷で悲しい歴史を背負っているんだと思うと、居たたまれなかった。むしろこんな悲しい過去を背負っているからこそ、村の人々はあんなにも笑顔で人に接することができるのだろうか。ベトナムは、今、数々の支援を受けて発展しつつある。けれど、私は孤児になってお金がなく私達日本人に請う子供達の姿を幾度となく見てきた。

今回の訪問で、ベトナムの人々の温かさ、そして過去と今の現状。いい所も悪い所も含めて、たくさんの事を知ることができて、日本という国では決してできない体験や感情を抱くことができて、本当によかったと思う。私の心の中で、タンビン村は第二の故郷となっている。Hen gap lai!! (また会いましょう)と交わした約束を胸に、私はいつかベトナムに再び行ける日を待ち望んでいる。そして、その時見るベトナムにストリートチルドレンの姿がないことを祈っている。



私の中の宝物

陵南中学校 1年

内村 果林

私は、“青少年国際協力体験事業”でベトナムに行ってかけがえのない宝物を心の中にいっぱいつめて日本へ帰国しました。

最初は会話も通じなくてとまどいをホストファミリーに隠せなかった自分が、今ではとてもなつかしいです。

ベトナムに行く前は、悪いこと（家が貧しい、家電がない、不潔）ばかり考えていて、とても不安だったけどベトナムについたときの第一印象は、私のイメージしていたものとは大分違いました。「日本とほとんど同じじゃん。」と思ったこともあったけれど路上で生活している大人、ストリートチルドレンとか、まだ4~6才くらいの少年少女が果物やおかしなどを売っている姿を見てア然としていた私たち。日本ではありえないことで、私にガムをさし出したあの小さな手を思い出すたびに「ぜんぶ買ってあげればよかった。」と胸が痛いんです。

ホストファミリーは言葉が通じなくてとまどっている私に「いいよ。いいよ」と言ってくれたりジェスチャーで言葉を伝えたりしてくれたりしました。あのときの言葉が伝わったうれしさは一生忘れません。

あと、私は果物（ザボンというタンビン村特産のぼんたんのこと）などをほんのちょっぴりとお手伝いをしたんですが、ベトナムの人は私に「いいよ、座ってて」とやらせてくれないので「私はザボン、とりたい。おねがい、やらせてください。」とカタコトのベ

トナム語で頼みこんだところ「じゃあ、気をつけてやってね。」とやらせてくれたのでうれしかったです。高いイスに登ってやるんですが私は高いところが苦手なため、少しこわかったけどなれたら楽しいものでした。終わってからそのザボンを食べました。日本のぼんたんよりおいしかったです。

あと、ベトナムのホーチミン市で戦争博物館で一番ショックだったのがベトちゃんドクちゃんのようにくっついてる赤ちゃんがホルマリンにつけられていることでした。枯葉剤のせいでこんな奇形児が生まれて、お母さんはどんなに悲しんだかなあ、と思いました。

協力隊員の話聞いて、言葉が通じなくて大変だと思うけどこの協力隊の人達は、ベトナムの人にちゃんと役に立っていると思いました。

最後の日はホストファミリーと一緒に泣きました。たった五日間の生活だったけど私はベトナムにとけこめて、色んな事を学び、教えてもらいました。

私はベトナムという国に、だれにでも優しくする心と人を愛する心を学び少し成長できました。本当に明るさと優しさにあふれた最高の国でした。ありがとうございました。

第11回鹿児島県青少年国際協力体験事業を終えて



安樂 大

出発の朝、誰よりも緊張し心ここにあらずは私だったかもしれません。中学生6人、高校生5人の11人の団結式での顔は、皆生き生きとして誰一人として不安な顔をしている子達はいませんでした。これから行くベトナムで経験する事を全て取りこぼしの無い様にと意気込みが全員に有りました。団長として、しっかりしなくてはと逆に励まされたような気がしました。

ホームスティ先はドンナイ省、ピンクウ地区、タンビン村。ホーチミンから北東に車で約2時間弱。人民委員会の全面的な支援の元、安全第一に受け入れして頂きました。人民委員会の主催で歓迎式。続いてビエンホア孤児院の子供達との交流会が始まりました。ちょっと不安が残る団員達の出し物でしたが、立派にこなし孤児院の子供達、そしてそれぞれのホームスティ先の青年達との交流が言葉の壁を乗り越え行われていました。タンビン村へのバスの中で積極的に話し掛けてくる青年達に少し圧倒されながら会話帳を使い必死でコミュニケーションを取ろうとする団員は、いじらしく可愛らしくも有りました。村での歓迎式、対面式の後それぞれの家へ。4泊の長い様で短いホームスティが始まりました。

タンビン村は、ザボンの産地。豊富に有る果物や食材の中ある意味裕福な村でしたが、環境の違う言葉の違う所での生活は団員それぞれ苦勞をしたようです。言葉の壁を目の当たりにしながら1日たつぷりとホストファミリーと過ごした二日目は、ベトナムでの生活に慣れていきながらも自分自身の力の無さを思い知らされた1日だった様です。

三日目は青年団と共に戦地へ。午後は地域関係者及び人民委員会のメンバーと才島へ。大雨に見舞われ屋内での歌合戦。戦争の傷痕と人民委員会独特の組織力を肌で感じ取った団員はベトナム特有の歴史、政治の過去と今を感じ取ったようです。

四日目はホーチミンの青年海外協力隊活動現場の視察へ。まず最初はシンクロのコーチとして活動する舩田隊員のスイミングクラブへ。ちょうど翌日が大会という事で、午前中の貴重な時間を無駄にしない様しばらく舩田隊員の指導をプールサイドから見学。ある意味優雅なスポーツと思っていたの団員達は、厳しい指導を目の当りにしてびっくりした様子。それもベトナム語で細

かい手先の話までしているのには驚かされたようでした。日本語でも難しいのにどうやったらあんなにベトナム語で上手に指導できるのか、どんな苦勞が有りますかとか。見学後の舩田隊員と活動に付いての説明を受けた後積極的に質問を繰り返していました。言葉の壁を乗り越え現地に溶け込んでいる舩田さん。団員達にはとても輝いて見えたようで、ベトナムの強い日差しに負けず劣らずの隊員に皆憧れを感じたようです。次にチョーライ病院で栄養士として活動する柿沼隊員の元へ。チョーライ病院は日本の援助によって建てられた病院。ベット数より入院患者さんの数が多いとの事。それほど信頼を受けている病院で栄養士としている柿沼さんは病気に対する栄養補給の取り組み方の違いや貧困による栄養不足をどの様にしたらこのベトナムに合った方法で補っていけるか。熱く語ってくれました。団員の心の中に何か自分達でも出来る事が有るのではないかという芽生えが感じられたのはチョーライ病院を後にしたバスの中でした。彼ら達の協力隊に関する質問の内容が変わってきたからです。最後に瀬戸口企画調整員から現在のベトナムにおける協力隊の現状やJICA事業について説明。東南アジア諸国でのスポーツ大会、シーゲームのベトナムでの開催を来年に控え良い成績を上げるべく国を挙げての選手強化の一端を青年海外協力隊が担っているとの事。たった二、三日でも言葉の壁や生活環境文化の違いを目の当たりにした団員達は、そんな壁を乗り越え現地に溶け込み活動している協力隊員がキラキラと輝いて見えたようでとても新鮮でかつ印象深いものになったようです。ある意味特別な存在としてあった協力隊を自分達でもきっと何かが出来、あんなに輝く事が出来る。そう感じ取ってくれた事と思います。そしていつの日か、。。。

この日の夜タンビン村での最後の夜をホストファミリーや村の人々と共に交流会で過ごし、そして最後の朝。短い期間であってもそれぞれの心の中に刻んだ何かを噛締めるように団員達はバスに乗り込み感謝を表し、再会を誓い大粒の涙と共に村を後にしました。村での思い出に浸っている暇も無くベトナム戦争の戦争記念館へ。あの村でもこんな惨劇が有ったかと思うと心を絞め付けられるようでした。

皆、何かを受け取ろう、感じ取ったものを心にしまい込もうと一生懸命でした。辛い過去の歴史をも目を背ける事無く必死に進んでいました。ある時は弱々しく支えなくては倒れてしまいそうな団員も力の限りふんばって立っていました。協力隊の活動を実際に見て心の中に国際協力と言う種が芽吹きました。今回の体験事業の成果はすぐ目に見えて現れてくる事も有りますが、5年10年の潜伏期間を経て出てくる事と思います。みんなの心の中に沸々と沸きその時々ステップアップに役立てばと思います。そしていつの日か国際協力、国際交流の輪で世界を、地球を身近に、小さくしてくれる事を期待します。

最後になりましたが、この事業にご支援御協力頂きました皆様に心から感謝致しますと共に、今後共御指導御鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

同行者が感じたこと



(財) 鹿児島県国際交流協会
大迫浩美

まずは、この鹿児島県青少年国際協力体験事業に参加させて頂いたことに感謝します。団員と一緒に過ごした時間、団員からもらったパワー、ベトナムで感じた温かい大家族との時間。どれも私にとって特別な体験でした。

団員11名と初めて会い、そして鹿屋での1泊2日の研修。そしてベトナムへ。日頃接することのない今どきの中高校生はどんな感じなんだろう？と、一抹の不安を抱えていた私は会うごとに驚かされました。多くの魅力を持った個性いっぱいのおみなに。きっと楽しい時間を過ごせる！という確信を持ちベトナムへ発ちました。

ベトナムに着き、孤児院等を訪問して2日目からは早速ホームステイ。みんな一人ずつ離れ離れのうえ、使えるベトナム語は挨拶ぐらい……。大丈夫かなと心配していたのですが、みんなの家を訪れると家族の温かい笑顔にすっかり打ち解けていました。言葉の壁に阻まれて言いたいことを言えずに苦しんでいるのではないかという心配をよそに、指差し会話帳を使ってコミュニケーションを図ったり、片言の英語で話したり、日本語を教えたりといった様子。言葉も大切だけど、自分はそれ以上に伝えようという心のほうが大切だと思う。という意見まで聞いて本当に感心させられる毎日でした。家からの風景をすてきな絵にした団員の才能にも驚かされました。現地の交流会でも臆することなく一人で踊りや楽器を披露したり、全員で島唄を歌ったりと大活躍でした。コミュニケーションの方法は言葉だけじゃないと、自然体で接する団員の姿に感動しました。

みんなのたくましい姿にすっかり安心し、私自身もホームステイを楽しませてもらいました。海外でのホームステイはなかなか経験できるものではありません。最初に驚かされたのは、毎日のように色んな人や犬までもが気軽に出入りする家。どの人が家族で、どの人が隣の人で……と理解するのに数日かかりました。(団員も同じようなことを感じていたようですが……) そんなオープンなベトナムの家族。日本人の私をすっかり家族として、迎えてくれる居心地のよい場所でした。どこかに行く時はお父さんのバイクで背中にくっついて、心地よい風を感じながら移動します。そうでない時はお母さんや妹に手を引いてもらって畑や、隣家へ。この年になって手を引かれる恥ずかしさと懐かしさ。そして、父の背中にくっついていたのはいくつまでだっただろう……と日本の家族のことをしんみりと思い出したりしました。ホームステイ別れの日、いつ帰ってこられるか分からないベトナムの家を去る気持ちは、団員のみんなと一緒にでした。ベトナムでの日々は心を全開で、何にでも触れた素晴らしい時間でした。この空がつながるベトナムにまた帰りたなあ。なんて思う今日この頃です。



青年海外協力隊OB会

河野理恵子

「ベトナムにいける！」ただそれだけで同行者として行くOKの返事をしたものの、出発の日が近づくにつれ、その責任の重大さに少し後悔することもありました。でも、「行ってよかった」今はそんな持ちです。

まずは皆さん、元気でいてくれてどうもありがとうございました。（帰国してから体調を崩した人が続出、と聞き私の仕事は帰国後からだったのでは…とちょっと反省）

ベトナムに行ってよかったと思えたことの一つは、一緒に行ったみんなと出会えた事です。普段接することが少ない中高生のみんなは、私にとってとても新鮮な人たちで、その感受性の豊かさやバツグンの吸収力に刺激を受けました。みんなに話したように、私は青年海外協力隊としてソロモン諸島に行き、民族紛争勃発のため、きちんとさよならできないまま1年2ヶ月で帰国することを余儀なくされた過去があります。ソロモンでの生活はとても楽しいものでしたが、全てが納得できたものではありませんでした。一人になって、仕事をしていく上で自分の不甲斐なさを感じ、自己嫌悪に陥ることが度々ありました。しかし、そんな自分に気づいたのはソロモンに行ったからです。だからこそ「今回のベトナム滞在は後悔のないものにしよう！」という気持ちでいっぱいでした。団長の「積極的に」という言葉は私にもとても響くものでした。

みんなもこのベトナム滞在中心の中でいろんな気持ちが起こっていたのでしょよね。その気持ちを大切にしていってください。

タンビン村ののんびりとした田園風景、デコボコの土道、うろつくヤセ犬、走り回るニワトリ、スコールの後に吹く心地よい風、お父ちゃんのバイクの後ろ、お母ちゃんの作る心のこもった料理、その辺になっている果物…これらは私の中に眠っている何かを呼び起こし、どんどん元気になっていっている自分がいました。正直な話、このウキウキ気分を他の人たちに知られてはマズイ、遊びに来ているのではない、と自分を抑えるのに必死でした。

ステイ先の家族をはじめベトナムの人たちはとても温かかったです。が、この人たちの背景には戦争の歴史で負った深い傷があるのだと思うと、複雑な気持ちになりました。ステイ先の10歳の娘アンちゃんはとても賢く、家でもよく勉強をしていました。こんな子供の持つ芽を惜しみなく発揮していける世の中であってほしいと強く願いました。そのためには戦争のないことはもちろん、何が必要なのか、「国際協力」のもつ意味をほんの序の口の部分かもしれませんが気づけた旅にもなりました。

とにかく、このベトナム滞在がみんなにとって、私にとってステップアップのための土台になったことはまちがいないでしょう。

カムオン、みんな。カムオン、ベトナム。

同行者が感じたこと



鹿児島テレビ放送

本田 恵

「ベトナムに取材に行ってみないか？」そう上司に言われたときは、ベトナム??という感じでしたが東南アジアを訪れたことがなかった私にとっては、とてもうれしい一言でした。東南アジアの中でも最も脚光を浴びているベトナムの魅力を肌で感じてみよう！私にとっても大きな期待と少しの不安を抱えた出発となりました。

今回の私の仕事は、県内の11人の中学生、高校生のベトナムでの様子取材すること。初めて会った子どもたちはさまざまな個性や可能性を秘めているに違いないとは思いつつも私の目にはちょっとおとなしそうにも見えました。だからこそこの子どもたちが、1週間という短い時間の中でどう成長していくのかを記録していくことがとても楽しみでもありました。

伝えたいこともなかなか伝えられない言葉の通じない世界。大丈夫かな？という私の心配をも のともせず子どもたちは自然な形で言葉の壁を乗り越えていました。「言葉は通じなくても大丈夫。心が通じていれば！」子どもたちが教えてくれたような気がします。

そして5日間のホームステイ。子どもたちは、ベトナムの家族の温かいもてなしを受けあつという間に家族の一員になっていました。私自身、子どもたち同様、ホームステイをさせてもらいベトナムの人々の優しさや人懐っこい笑顔に触れ、子どもたちがホームステイ先でどんな日々を送ったのか肌で感じることができました。だからこそ家族と別れる際の子どもたちの涙の理由が、身にしみるほど分かりました。

自然と人間とがうまく共存した生活。そして人々の優しさに触れ、家族、地域の絆の強さを感じさせるベトナムでの生活は子どもたちにとって日本が経済発展の中で失ってしまった大切な何かを見つけることができた1週間になったようです。ベトナムを去るとき子どもたちの表情は、出発前に比べて全く違っていました。おとなしかった子どもも自信に満ち溢れた表情に変わり、精神的にもひとまわりもふたまわりも成長したように見えました。

私を変えた夏—これから自分たちの歩むべき道を決めていく子どもたちが、中学生、高校生という多感な時期にこのような貴重な体験ができることは本当に恵まれているなあとだいぶ昔に中学校、高校を卒業した私はとてもうらやましく思います。



南日本新聞社 グラフィックス部

谷口 博威

ステイ初日の夜「1位ハイネケンビール、2位タイガービール、3位333ビール！」とステイ先の近所の人には教えてくれた。氷が心配なので氷なしのぬるいタイガービールを飲む。その後、次々と知らないオジサンたちがやって来て酒を回し飲み（後で分かったが、その中に村長さんもいた）。

2日目は、8月6日ニャーさん一家と私の四人だけで仲良く夕食。食事中、お父さんのニャーさんがテレビを見ろと言った。あっそうか、今日は広島原爆投下の日だった。その後、2階のベランダで奥さんにはナイショでお父さんと酒盛り。娘のタオちゃんが私たちを発見してリンゴとリュウガンを持ってきてくれた。窓にはヤモリがペタペタ貼り付いていた。

3日目、シャワーを浴びていると「タニグチ、タニグチ」と何回も呼ぶ。出てみると村長と団長とニャーさんの親戚が来ていて飲み会が始まった。飲み会の後半には、ニャーさんのお父さんが登場。飲み会后、娘のタオちゃんと近所のトオーちゃんに折り紙を教える。しかし、疲れすぎて上手く作れずバカにされそうになり（元々あまり上手ではないが…）やけくそでヒコーキを作って飛ばして遊び、死んだように寝る。

4日目、疲れもピークに達し交流会の後は死んだように寝た。夢か現実か分からない時、ニャーさんがミルクコーヒーを作ってくれた。「あなたに会えてうれしい」と言ったので「僕もです」と言った。そうか…もうお別れか。

別れの朝、娘のタオちゃんを絵にしてプレゼントした。でもタオちゃんは無表情…。ニャーさんのお父さんやよく知らないお姉さんもやって来てお別れ。元気なお父さんだ。

鹿児島ではダレヤメはしない方だが、なぜかベトナムでは毎日のようにダレヤメ。疲れたが、楽しい毎日だった。

同行者が感じたこと



枕崎市役所企画調整課

日高 喜文

初日は23：00にベトナムの空港に到着し、ここからベトナムでの案内をしていただいた枕崎出身で青年海外協力隊OBの中村さんに迎えられホーチミン市内のホテルで宿泊、翌日からの行動となりました。翌日、バスで移動し最初に訪れたビエンホア市の孤児院にて、人民委員会の歓迎の後孤児院の歓迎式が行われました。そこでは早速、孤児院の子供たちと生徒たちは会話を始め、驚かされました。また、予定した出し物についても、それぞれ緊張した様子もなく披露し、瞬く間に終了しました。その後途中、文明墓地を周り夕方にタンビン村へ到着し、村の人民委員会で入村の歓迎式が行われた後、それぞれのホストファミリーの出迎えで、オートバイでホームステイ先へと移動となりました。

それからタンビン村での生活を体験しましたが、村は舗装道路は1本走っているだけで、その他の道は赤土のままの状態、そこを転ぶことなくオートバイで2人～3人乗りで行動していました。最初は、ヘルメットもなしで交通ルールもないような状況で危険を感じましたが、この国ではこれが普通でした。

私のホームステイ先は、世帯主のロウさん奥さんのナーさん息子のハンサン嫁のエンさんその息子のトン、シャイの6人家族でした。言葉については指差し会話帳がありましたが、うまく伝わらなかつたりして、最初のうちは時間を要しましたので、他の生徒たちはうまくやっているのかが心配でした。ただ、お互い相手のことを理解しようとしていくうちになんとか家族とも溶け込んでいきましたのである意味大丈夫なのかなとも思いました。食事は、タイル張りの床で行いますが、日本同様はしを使って食事を行うので全然違和感のない雰囲気でした。また、米を主食とし米を素材にした麺類や魚で作った醤油などの日本と同じような食事で馴染みやすいものでした。ホームステイ先のハンさんにオートバイで送ってもらい、一人一家庭で散らばっている生徒たちの状況を確認にいきましたが、生活習慣が多少違うとはいえ、ホームステイ初日から、優しい村の人たちの中で生徒たちのほうが現地の生活にすぐに馴染んでいたようでした。大人が心配するほど生徒たちは、全然落ち着いた様子で、家事の手伝いを行ったり、ベトナム語と逆に日本語を教えたりとホームステイの家族とうまくやっていました。

日程の中でベトナム戦争の激戦地であったD地区やベトナム戦争の資料が展示されている博物館を見学しましたが、テレビや本の中では見ることでできない、その悲惨さは強烈なものでした。

また、青年海外協力隊の活動については、私自身、今回の鹿児島県青少年国際協力体験事業に

同行する前は、市の広報紙等で募集を呼びかけることは行ってきましたが、実際にどのようなことを行っているのか説明を求められても、今までは詳しく答えることができなかったと思います。現場については実際に見たわけでもなく、青年海外協力隊に参加するための職種は120種類ほどあり現在は70カ国で活動を行っていますが、ほとんどの人がそう思うように井戸を掘ったり、学校で授業を教えたりというイメージでしかとらえることができませんでした。確かにそういった目的で協力隊に参加している方もいますが、他の職種についてはなかなか実際の想像はつきませんでした。子供たちにとって、異国で言葉についての壁を乗り越えながら、さまざまな職種で隊員たちが頑張ってる姿を見ることは、今後の将来の職業とか考えるときに大きな判断材料となったりするでしょう。また、ボランティアとしての青年海外協力隊の実際の現場を見て、青年海外協力隊に対する考え方が大きく変わったと思います。

今回のベトナムでは、柿沼隊員のように病院の栄養士で派遣されている隊員のほか、舛田隊員のようにスポーツの指導を行う協力隊員が多くみられました。シンクロナイズスイミングやテニスなどの分野で指導を行っており、来年ベトナムで開催されるSEAゲームという東南アジアのオリンピックのために指導を行っているなど、協力隊員自体が高い技術をもって選ばれていることを再認識させられました。このような現場を見ることにより、市町村としての協力隊への支援についても、今後どうしていくかも考えさせられました。

帰国前日の夕方からは村の交流会が行われましたが、その歓迎ぶりには驚かされるとともに、交流会も生徒たちの練習した出し物、タンビン村の芸能、鹿児島のおはら節などで盛りあがりまりました。

帰国当日の朝、出発の時刻まで時間があるので、ハンさんがコーヒーでも飲もうと言って、昨晚交流会のあった場所へつれていってくれました。昨日の騒がしかった会場の雰囲気はなく、昨日は暗くて分からなかったのですが、周りは池になっておりさらにその周りは緑に囲まれていました。橋渡りで池の中の喫茶スペースに渡ることができ、そこで、ベトナムアイスコーヒーを飲みながら、二人で話をしました。ハンさんは、自然に囲まれたこの静かな場所によく一人で来て、気分をリラックスさせるのだと言っていました。指差し会話帳を使いながら、ベトナム戦争について質問をすると、戦争は二度とおこしてはならない。政治が良くないと戦争は起きる。しかし、今のベトナムの政治は大丈夫であろうと言っていました。私も今は静かなこの地もベトナム戦争で多くの犠牲を払ったのだとふと考えると、戦争を二度とおこしてはならないと感じました。日本も40年～50年かけて戦後の復興を遂げてきたが、当時の日本も今のベトナムのようだったのではないかと思われるという、ベトナムは貧乏な国で、日本のように発展していければいいがとつぶやき、ハンさん自身発展した都会の日本に行ってみたくて言っていました。

私は物質的に必ずしも裕福ではないがこの地が好きになりました。人々の顔を見ているとなぜか満ち足りているように感じました。発展することも必要だが、できれば今と変わらないこのままのベトナムの雰囲気を残していければと思いました。おそらく、生徒たちや参加者全員がそのように思っただろうと感じます。最後に、今回のような青年海外協力隊の現場を見ることのできるのはこの事業ならであり、参加者は協力隊に参加したいというのはもちろんのこと、青年海外協力隊が何を行っているのか、その目で確かめたわけで、青年海外協力隊についての理解者として今後も輪を広げていくのではないのでしょうか。

えて... 平和村の夏



第十一 鹿児島県青少年
国際協力体験事業で県内
の中高生十一人が八月四
十日、ベトナムを訪問
した。

中高生らがホームステ
イしたのは、ベトナム最
大の商業都市ホーチミン
市から五十キロほど北東に
あるタンビン村。ドンチ
イ省の省都ビエンホア市
近郊のベッドタウンで、
人口七千人。ベトナム戦
争時代まで三つの村だっ
たが戦後、名前をタン
(新)ビン(平和)とし
て一つになった。特産品
のザボンが有名。



ステイ先のウィンさん(16)とイ
ラストやベトナム語、日本語、英
語で交流中の国分南中3年・
松本康那さん(15)



加治木高1年・松元啓祐くん(15)のステ
イ先は精米所やザボンの卸をしている。家
族が心配する中、自転車でザボン運びに
挑戦。ザボンは1個100円から150円くらい



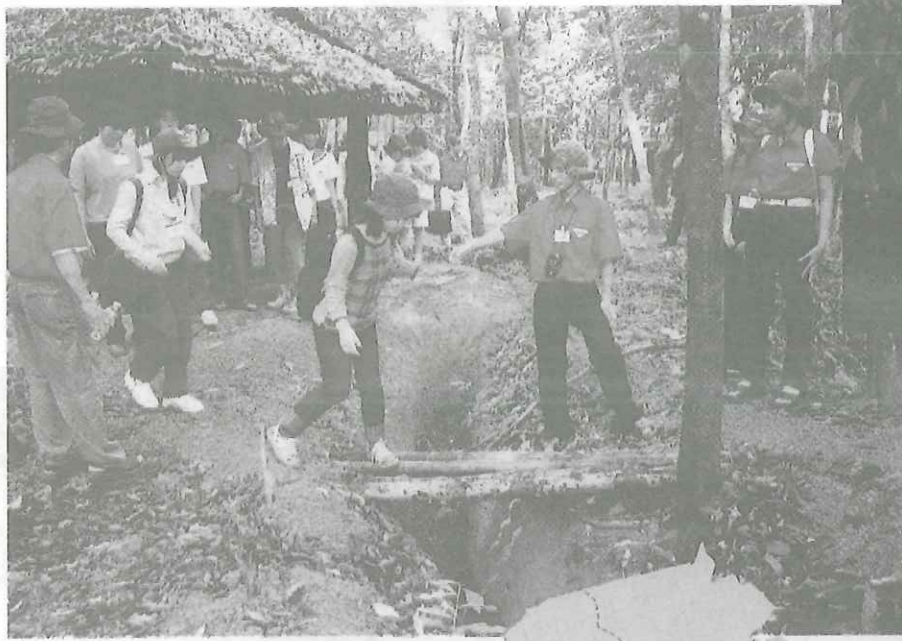
←ザボンの皮



豚に水をかける手伝いをした鹿児島女子高
1年・竹原有佳菜さん(15)はおやつ
のザボンでアート。青年団からもらった帽子で決め
ポーズ



柴さんは、タン景などを絵にしの家族にプレ



日本舞踊で文化交流



沢美さん

ビンクー郡にあるD地区の戦場跡の野営地などを見学。煙を出さない調理場など、さまざまな工夫がなされている。写真は塹壕を渡る加治木高2年・伊藤沢美さん(16)。おっとと!





村の交流会で、垂水中2年・柴ひかりさん(13)は徳之島に住んでいたころに習っていた三線(さんしん)で「徳之島小唄」や「安里屋ユンタ」を披露



村の建物は平屋が多く、所々に小さなビルが建つ。奥の青いビルは上川路くんのステイした家。建築家のお父さんが建てた

村の風をステイ先で体験した。



生きたまま売られている?アヒル



タンビン村の街では5時ごろになると、鶏の鳴き声とバイクの音で自然と目が覚める。村の市場に活気が出てきたころ、枕崎中1年・森大樹くん(13)はステイ先のお母さんらとお買い物

森くんは、「ベトナムの食べ物はあまり口に合わなくて、料理では「フォー」(香草入りベトナムうどん)が苦手」と少々不満気味

交流



枕崎中3年・岸田萌さん(15)のステイ先はビリヤードやカラオケのあるカフェ。最近、日本にも上陸して人気上昇中のベトナムコーヒーの入れ方を二女のチャンさん(15)から教わる。価格はアイスで約30円、ホットは約15円。安い!



交流

ベトナム語の発音は難しく、「マ」だけでも6種類ある。鹿児島玉龍高1年・上川路太雅くん(15)は、日本で練習したベトナム語が通じず緊張していた。「ステイ先のパートナーや家族の笑顔を見て、言葉が通じなくても、心は通じることが分かった」と自信がついたようだ



Đoàn học sinh - sinh viên tình nguyện tỉnh Kagoshima (Nhật Bản) thăm Đồng Nai

(Xem tin trang 11)



Các học sinh Nhật Bản tặng quà lưu niệm cho các em ở Trung tâm bảo trợ và huấn nghệ cô nhi Biên Hòa.

(Ảnh : K.T)

【DongNai新聞 - 8月6日】

鹿児島（日本）からの中高生Dong Nai省を訪問

8月5日DongNai省に到着した鹿児島（日本）からの中高生一行21名は、同省内の孤児院を訪問してプレゼント、記念品などを贈呈、同院の孤児たちと相互に歌謡、ダンス披露などの文化交流を行い、その後に文廟にて線香を捧げTan Binh村に向かった。同村において5日から9日までホームステイを展開。鹿児島からの一行21名はDong Nai省において相互に交流、期間中、現地の生活を理解するために村の1家庭に1名ホームステイを行うDong Nai省内の高校生との交流も行う。プログラムの内容として省内の旧戦地「D」と「オ島」訪問も計画している。今回の訪問は昨年引き続き2回目の交流です。

Đoàn học sinh - sinh viên tình nguyện tỉnh Kagoshima (Nhật Bản) thăm Đồng Nai

(ĐN) - Ngay sau khi đến Đồng Nai, chiều ngày 5-8-2002, đoàn học sinh - sinh viên tình nguyện của tỉnh Kagoshima (Nhật Bản) đã tham dự chương trình thăm, tặng quà và giao lưu văn hóa văn nghệ với các em nhỏ ở Trung tâm bảo trợ và huấn nghệ cô nhi Biên Hòa. Sau đó đoàn đã đến tham quan, dâng hương tại Văn miếu Trấn Biên. Chiều cùng ngày, đoàn đến xã Tân Bình (huyện Vĩnh Cửu) mở đầu cho chương trình "Homestay" từ ngày 5 đến 9-8-2002.

Đoàn học sinh - sinh viên tình nguyện tỉnh Kagoshima (Nhật Bản) gồm 21 thành viên đến Đồng Nai trong chương trình giao lưu giữa thanh niên

hai tỉnh. Trong những ngày ở Đồng Nai tham gia chương trình "Homestay", các thành viên trong đoàn được phân ra để sống tại các hộ gia đình ở xã Tân Bình nhằm tìm hiểu phong tục, tập quán, đời sống cũng như tham gia sinh hoạt, lao động cùng các hộ gia đình; giao lưu với đoàn đại biểu học sinh - sinh viên tỉnh Đồng Nai, thăm Chiến khu Đ, đảo Ó - Đồng Trường, giao lưu văn hóa văn nghệ với các hộ dân và thanh niên địa phương... Được biết, trong dịp hè năm 2001, cũng đã có một đoàn đại biểu học sinh - sinh viên tỉnh Kagoshima đến Đồng Nai.

KIM TUẤN

Chưa một lần gặp mặt nhưng các thành viên trong đoàn đại biểu học sinh-sinh viên (HS-SV) tỉnh Kagoshima (Nhật Bản) và những hộ gia đình ở xã Tân Bình, huyện Vĩnh Cửu như đã thân quen nhau tự bao giờ! Ngay sau lễ đón tiếp tại trụ sở UBND xã, 21 thành viên trong đoàn, trong đó có 11 HS-SV, lần lượt được 18 hộ gia đình ở các ấp Tân Triều, Vĩnh Hiệp, Bình Phước đón về nhà. Chương trình "Homestay" kéo dài 4 ngày (từ ngày 5 đến 9-8) tại làng buổi Tân Triều đã bắt đầu như thế!



Shiba Hikari biểu diễn đàn Samixen cho các gia đình ở Huỳnh Thị Ngọc Cẩm (ấp Tân Triều) cùng thưởng thức.

ĐOÀN HỌC SINH-SINH VIÊN TỈNH KAGOSHIMA (NHẬT BẢN) VỚI CHƯƠNG TRÌNH "HOMESTAY" TẠI ĐỒNG NAI:

Làng buổi Tân Triều âm áp tình đất, tình người

LÀNG buổi Tân Triều vốn bình lặng bỗng chốc trở nên sôi động kể từ khi có sự xuất hiện của các HS-SV Nhật. Những người hàng xóm khi biết tin liền kéo nhau đến nhà cô Huỳnh Thị Út để chào hỏi và "xem cho biết mặt" cậu học sinh 15 tuổi có tên Matsumoto

Kiesuke. Ngay trong đêm đầu tiên sống ở làng buổi, Matsumoto Kiesuke đã được thưởng thức một bữa cơm đậm ấm không khí gia đình. Và dù có bất đồng ngôn ngữ nhưng mọi người như vẫn hiểu nhau khi 2 bên giới thiệu những album ảnh lưu niệm. Sáng hôm sau, Kiesuke cùng Dũng (con trai cô Út) tham gia hái bưởi bán cho thương lái. Kiesuke nói rằng mình không thể đi đâu cả hết tâm trạng thích thú khi được dạo quanh vườn bưởi, được ăn những trái bưởi vừa hái xong và được làm việc như một người làm vườn thực thụ! Kiesuke còn có một niềm vui khác là tranh thủ thời gian rảnh cùng các bạn người Nhật phối hợp với các thanh thiếu niên trong xóm chơi bóng đá, bóng chuyền giao lưu trước sân nhà. Kiesuke miêng cười tươi, cho biết: "Các bạn ở đây rất mê chơi đá bóng. Chỉ một khoảnh đất nhỏ cũng có thể trở thành sân bóng! Ngoài ra, các bạn cũng giỏi tiếng Anh nên chúng em có thể trao đổi với nhau dễ dàng hơn".

Nhằm thắt chặt hơn nữa mối quan hệ hữu nghị giữa thanh niên hai tỉnh Đồng Nai-Kagoshima (Nhật Bản), đoàn đại biểu HS-SV tỉnh Kagoshima với 21 thành viên có mặt tại Đồng Nai từ chiều ngày 5-8. Đoàn đã gặp gỡ, giao lưu với các em ở Trung tâm bảo trợ và huấn nghệ có nữ Biên Hòa, thăm Văn miếu Trấn Biên và thực hiện chương trình "Homestay" tại xã Tân Bình (huyện Vĩnh Cửu) với nhiều hoạt động: từ 5-8, các thành viên chia ra sống tại 18 hộ gia đình thuộc 3 ấp trong xã; ngày 6-8, tham gia sinh hoạt, giao lưu và lao động cùng các gia đình; ngày 7-8, thăm Chiến khu D, giao lưu văn hóa thể thao giữa HS-SV của hai tỉnh tại đảo Ông Trùng; từ ngày 8-8, giao lưu văn hóa văn nghệ với các hộ dân và sáng ngày 9-8 chia tay các gia đình, kết thúc chương trình. Trước đó, tháng 7-2001, một đoàn HS-SV của tỉnh Kagoshima lần đầu tiên đã đến Đồng Nai thực hiện chương trình giao lưu tại TP Biên Hòa và huyện Nhơn Trạch. Anh Nguyễn Sơn Hùng, Phó bí thư thường trực Tỉnh đoàn Đồng Nai cho biết: "Sau 2 lần HS-SV Kagoshima đến Đồng Nai, tình cảm đang dần tình dục có thể đưa một đoàn HS-SV tiêu biểu của Đồng Nai sang Kagoshima thực hiện chương trình giao lưu trong tương lai. Nếu được như thế, thanh thiếu niên hai tỉnh sẽ hiểu nhau nhiều hơn và học hỏi lẫn nhau được nhiều điều bổ ích".

Trái ngược với tình thân ái của Shiba, Hou Takumi lại là một cô nữ sinh 16 tuổi khá sôi nổi và hoạt bát. Trước khi sang Đồng Nai, Takumi chỉ mới biết vài từ tiếng Việt. Mấy ngày sống tại nhà cô Nguyễn Thị Nga (ở ấp Vĩnh Hiệp), Takumi tranh thủ học tiếng Việt từ bà người con gái của cô. Takumi còn tập làm cơm, hái rau nấu canh, rửa chén bát, phụ nấu cơm... và tần cho bầy heo con trong chuồng!

(Xem tiếp trang 11)
Bà, ảnh: KIM TUẤN

【Dong Nai新聞-8月8日】 鹿児島（日本）からの中高生一行 Dong Nai省内でのホームステイ

今までに会ったこともないのに昔からお互い知っているかのような友達・・・5日、村の人民委員会での対面式を終えて一行21名は同村内で18のホストファミリーにてステイ、そのうち中高生は11名。期間が5日～9日までの4日間、「ザボンの村」にて行う

相互の絆を深めるために鹿児島から訪越してのホームステイの内容は次のとおり、

- ・8月5日午後、鹿児島からの中高一行21名、Dong Nai省到着
 - ・同省内の孤児院と文廟を訪問して以後 Vinh Cuu地区 Tan Binh村でホームステイを行う。
 - ・多くの交流活動が計画されている。
 - ・8月5日夕方、メンバーはTan Binh村内、18のステイ先に移動
 - ・8月6日丸一日ステイ先にて家族の仕事を手伝う
 - ・8月7日省内の旧戦地「D」と「オ島」を訪問、見学
 - ・8月8日夜、ホストファミリーとの交流
 - ・8月9日ホームステイ終了。村（ホストファミリー）とお別れ
 - * 2001年7月21日、鹿児島からのホームステイ第1回目が同省内のNhon Trach地区を訪問しています。
 - * Mr. Nguyen Son Hung (Dong Nai省青年団副書記長)によるとDong Nai省では鹿児島からの中高生を2回受け入れたが、近い将来私たち（Dong Nai省青年団）も学生（青年団）の鹿児島への派遣を計画している。
- そのことにより相互間での交流が活発になり理解が深まる。

「ザボンの村」 いつも静かな場所であるが、日本からの中高生訪問と同時にとてもぎやかになった。その中、松元啓祐君がステイするMrs. Huynh Thi Ut家では多くの近隣の人々が訪ねてきた。はじめのステイの夜、松元君は家族と一緒にとてもあたたかな夕食をともにした。言葉は通じなくても写真を見せたりで多少の理解もできる。翌朝、啓祐とDung (ユン) 君はザボンを収穫して集荷業者に売りました。啓祐君は、ザボンの収穫etc...を通してすることがなぜか楽しいんだけど、どうやって表現したらよいか...

また近所の子もたちとの遊びを通して子どもはボール遊びが大

好きで少しの英語も通じた。

啓祐君のところから近い柴ひかりさん宅では、彼女は殆どと言っていいほど喋らないけど、反面、はじめの一日、ステイ先の景色が珍しいのか絵を描いて過ごした。ひかりさんの話では家族同様に人となしを受けてとても気に入っている。彼女は三味線も家族の人に披露した。

伊藤沢美さんはとても明るい。ホームステイの前に日本でベトナム語を勉強した彼女は、家族の3姉妹からたくさんベトナム語を教わった。ステイ中、畑の草を取ったり料理を手伝ったり、お皿を洗った。家で飼っている豚にも水をかけたり、市場に姉妹と買い物にとetc... 忙しく働いた。「沢美はよく働いてくれた」ステイ先のお母さんの話し。

沢美さんは昨年の夏アメリカ（ホームステイ）に行ったことがあり、そのことと彼女の話しでは「ベトナムのほうが親しみを感じる。よたくさんのベトナムの文化・習慣を発見できて、家族の絆がよい」。一方、ステイ先のお母さんの話しでは、「沢美そして日本からの子どもたちは本当に多くのものを吸収しよう、と一生懸命、そして家の仕事を手伝ってくれるのだけれど、彼女たちのことが心配」で少し困惑気味。さらに日本からの子どもたちなので体調（食事面）を崩すのではと心配、食事にも気を遣います。

岸田萌さんのステイするLe Thi Bay (祖母、70才以上)さん宅ではカフェを経営しており祖母さんはお客に「この娘は私の孫でちょうど日本から帰ってきたんだ」と紹介。孫がお店を手伝う Bao Tranと萌さんは僅かな英語と指差しガイドブックを使ってコミュニケーションを行う。萌さんはコーヒーを入れたり春巻きを作ること教わった。萌さんの話しではステイは短すぎて思うことを十分に学べない。(できれば)もっと長くステイしたい。

安楽団長の話しによると、今回のステイ者は昨年度に比べて全体的に若く、私自身の参加も初めての、こともありとても心配だった。でもDong Nai省人民委員会関係者、青年団、ステイ先の家族の暖かいおもてなしを受けて日本からの子どもたちもステイ先の村の人たちに溶け込んでいるのを見るととても有り難い。感謝の気持ちで一杯です。短い滞在では有りますが、確実にこの交流は根付いていると思います。

ホームステイは地域での生活をととして文化・習慣を学びます。さいごに、いつかDong Nai省からの学生が鹿児島に御出でになることを希望します。

— 8日の夜はホストファミリーとの交流会が予定されています。 —

Tạm biệt nhé các bạn Kagoshima!

Bắt gặp hình ảnh các bạn Mitsushi, Taiga, Takumi, Takehara đang cười cở trong vườn có Nặng - ấp Tân Triều, trán lấm tấm những giọt mồ hôi, động tác còn vụng về, chúng tôi hiểu rằng ở Nhật Bản, các bạn chưa từng làm công việc này. Song với tinh thần yêu thích lao động, các bạn trẻ cứ nài nỉ chủ nhà được phụ giúp những công việc trong nhà. Chúng tôi còn nhớ như in hình ảnh bạn Takumi cứ chỉ tay vào trang bìa của quyển sách song ngữ Nhật - Việt và đứng lại ở chỗ "Tôi muốn giúp"...

Mặc dù xem các bạn trẻ như thành viên trong gia đình, nhưng vốn có tính hiếu khách, chủ nhà không để các bạn làm việc gì. Nhưng khi thấy các bạn nài nỉ quá, chủ nhà cảm lòng không đành cũng cố thu xếp cho các bạn lật rau, gọt khoai, tẩm heo, dẩy buôi, cuộc cở cho đỡ buồn. Bạn Mitsushi lộ rõ niềm phấn khởi khi tiếp chuyện với chúng tôi: "Phong cảnh ở đây rất đẹp. Người Việt Nam rất thân thiện, rất tử tế, vui vẻ và dễ mến. Em thấy mình như một thành viên của gia đình, được sinh hoạt, được nói chuyện cùng với mọi người trong nhà. Em vui lắm!"

Có lần bạn Taiga cảm thấy bối rối không hiểu vì sao mọi người nhìn về phía mình mà cười. Thì ra khi ăn cơm, bạn không chú ý đến câu hỏi của mọi người, nên không phân ứng gì. Thế là bạn trấn tĩnh lại và nói chuyện trở lại bình thường với mọi người. Có bé Shiba Hikari dù mới 13 tuổi, nhưng đã thể hiện nét trầm ngâm và thiên về cuộc sống nội tâm. Dọn về ở cùng với gia đình chị Cẩm - ấp Vinh Hiệp, có bé đã vẽ ngay một bức tranh phong cảnh nào là nên nhà lát gạch, cổng rào, hàng cây. Rồi hình ảnh một người phụ nữ Việt Nam đang yêu đi ngang qua công nòng trong chiếc nón lá, áo bà ba với đôi quang gánh trên tay. Có bé nói: "Em muốn vẽ để làm kỷ niệm về nơi mình đã đến. Hình



Các bạn Nhật đang chơi bóng cùng các em nhỏ Việt Nam

Tinh thần say mê lao động, ham học hỏi, coi mớ, hoạt bát, yêu thiên nhiên, thích giao lưu quốc tế, giao tiếp bằng nhiều ngôn ngữ Nhật, Anh, Việt và điệu bộ, đặc biệt là ở độ tuổi còn rất trẻ từ 12 - 17, đó là những đặc điểm nổi bật ở 11 bạn học sinh, sinh viên tình nguyện của tỉnh Kagoshima, Nhật Bản trong chương trình Homestay (ở lại nhà dân). Đây là lần đầu tiên các bạn đến Việt Nam và được tham gia sinh hoạt như một thành viên trong các gia đình thuộc ba ấp: Vinh Hiệp, Tân Triều, Bình Phước (xã Tân Bình, huyện Vĩnh Cửu). Các bạn đều cảm thấy rất thích thú và khám phá được nhiều điều mới mẻ trong nếp sinh hoạt của các gia đình nông thôn Việt Nam.

ảnh mà em thể hiện trong tranh rất phổ biến ở đây và nó rất gần gũi với hình ảnh ở Nhật Bản thời xưa". Còn em Takumi, 16, tuổi đang học lớp 11 Trường Kajiki, ngay lúc vừa đến đây đã được các bạn nhỏ ở ấp Bình Phước dắt đi chợ quê. Cảm giác của Takumi rất vui khi nhìn thấy cảnh

quên và nhớ nhà nhưng các em cho biết "chỉ nhớ nhà chút chút, vì ở đây vui quá". Ông Hiroshi Anraku - Trưởng đoàn - cho biết: "Các em ít nhớ nhà là chứng tỏ vùng đất này đã thật sự quyến rũ các em, các em đang rất muốn khám phá về những điều các em còn biết quá ít về Việt Nam và về Đồng Nai nói riêng. Trước khi sang Việt Nam, đoàn thanh niên học sinh tỉnh Kagoshima đã được thông báo và chuẩn bị từ tháng 2-2002. Sau đó các em có 3 ngày để học về văn hóa, những câu chào hỏi với các du học sinh Việt Nam tại tỉnh Kagoshima. Cùng đi với đoàn còn có cô Megumi, phóng viên Đài Truyền hình Kagoshima; anh Hirotsuka, phóng viên Báo Nihon Shimbun sang cùng để quay cảnh các em sinh hoạt ở đây. Sáng 7-8, đoàn thanh niên học sinh tỉnh Kagoshima đi thăm di tích lịch sử Chiến khu D, thăm khu du lịch đảo Ô - Đông Trường. Tâm trạng các em đều phấn chấn vì đây là thực tế sinh hoạt để các em hiểu về lịch sử, cảnh quan vùng đất Đồng Nai. Trong chuyến đi này, đoàn cũng có chương trình giao lưu văn hóa - văn nghệ, thể thao với đoàn đại biểu học sinh, sinh viên Đồng Nai. Ngay sau khi đến Đồng Nai đoàn đã tham dự chương trình thăm, tặng quà và giao lưu văn hóa văn nghệ với các em nhỏ ở Trung tâm Bảo trợ và Huấn luyện Cờ nhi Biên Hòa. Đoàn cũng đã đến tham quan, dâng hương tại Văn miếu Trấn Biên. Anh Đặng Mạnh Trung - Bí thư Tỉnh Đoàn Đồng Nai - cho biết: Mùa hè năm ngoái, Đồng Nai cũng đón một đoàn học sinh Nhật Bản đến Nhon Trach sinh hoạt Homestay. Khi chia tay, các em rất trân trọng và mãi mãi tạm biệt nhau được để ra xe. Có em òa khóc khi phải xa những người bạn mới ở Nhon Trach, xúc động lắm. Còn chị Bùi Thị Thủy Nhung, công tác viên của chương trình, kể lại: Sau lần chia tay đó các em vẫn tiếp tục liên lạc với nhau bằng thư tay, e-mail để trao đổi thông tin về học hành. Đặc biệt có một bé gái Nhật Bản vốn rất hay khóc nhènh lúc ở nhà nhưng sau chuyến đi đã thay đổi hẳn tính tình vì thấy các bạn nhỏ ở Việt Nam giỏi giang quá đủ sinh hoạt còn hiểu thiếu thốn.

Văn biết rằng có gặp gỡ ít có chia tay, tạm biệt. Hành trang của các bạn học sinh Nhật Bản mang về sẽ đầy ắp những kỷ niệm thân thương về vùng đất Đồng Nai hiền hòa, mến khách. Trưởng đoàn Anraku cứ nhắc lại: "Nhất định chúng tôi sẽ lại đến Đồng Nai lần sau. Tôi và các em đều nhớ mãi về mảnh đất này..."

PHƯƠNG TRANG - NGỌC KIM

mưa bán mớ rau, con cá của người dân. Takumi kể lại ở Nhật chủ yếu em đi siêu thị nên không bao giờ được chứng kiến cảnh sinh hoạt ở chợ quê như thế này. Năm ngoái Takumi sang Mỹ cũng ở nhà người dân bản xứ theo chương trình Homestay nhưng Homestay ở Đồng Nai thú vị hơn nhiều... Khác với vẻ lém lỉnh của Takumi, Yukana lại chỉ cười hiền lành cho biết: "Đây là vùng đất rất đẹp, tuy em và các bạn nhỏ ở đây không nói chuyện được nhiều nhưng em cảm thấy các bạn rất dễ mến...". Đoàn học sinh tỉnh Kagoshima được bố trí ở nhà dân để sinh hoạt theo phương thức Homestay. Đây là hình thức các em học sinh trên thế giới rất ưa thích. Qua đây các em sẽ có dịp tìm hiểu vùng đất xứ sở mà các em đến để tìm hiểu về đời sống văn hóa, phong tục, tập quán sinh hoạt qua những thực tế sống. Em Megumu, 15 tuổi, học cấp 2 Trường Makuravaki, ở lại nhà cô Lê Thị Bảy, ấp Bình Phước - xã Tân Bình, ngay khi vừa đến, em đã tỏ ra rất nhập cuộc và quán quít với em Bảo Trân, con gái của cô Bảy. Lúc chúng tôi đến, Megumu đang say sưa cuốn chè giò cùng gia đình cô Bảy. Cô Bảy cho biết: "Các em nhỏ Nhật Bản đi bán quán nước nên em Megumu cũng tập phụ bán hàng, tập pha cà phê, tập tính tiền và làm tất cả những công việc vặt vãnh. Bà con xung quanh ai cũng yêu mến và rất thích đón các em về nhà sinh hoạt cùng. Có các em từ mấy bữa nay, cả xài vui rộn ràng...". Các bạn học sinh tỉnh Kagoshima nhận xét: Các bạn nhỏ ở xã Tân Bình đều rất hay làm, ham hiểu biết và có ý thức phụ giúp cha mẹ công việc nhà. Ở Nhật rất hiếm khi các em phải làm việc nhà. Cả Megumu, Takumi, Yukana trước khi sang Việt Nam đều được bố mẹ dặn dò rất kỹ là phải cố gắng thật nhiều và lo lắng sự các em không

【Lao Dong (労働者) 新聞 8月9日】
バイバイ 鹿児島からの中高生たち!

満志、太雅、沢美、竹原さんたちは家の手伝いで草取りをした。その様子から彼らは今まで草を取ったことがないと思った(記者)。それでも一生懸命でほかにも手伝いも要求して、沢美さんはガイドブックを指して「お手伝いをしたい」と伝える。

満志くんは、ベトナム人は家族思いで礼儀正しくて陽気、自分も家族の一員という気分で、とても嬉しく思う。

沢美さんは市場に買い物に出かけて地域の人々が野菜、魚など販売する様子に強い興味を持った。なぜなら日本ではスーパーマーケットでの買い物しかない。

有佳那さんはTan Binh村はとてもきれいなところ、言葉が喋れないので地域の人とお話できなくても気持ちで交流ができる気がする。

鹿児島からの中高生たちの感想として、Tan Binh村の子どもたちはいつも家族の手伝いをしてる。日本では家族の手伝いをする機会が、さほどないけれど。

鹿児島の中高生はホームステイ参加(出発)する前、両親から「ベトナムに行ったら、ベストを尽くして頑張りなさい。でも、慣れない経験だから心配、短期間の外国旅行なので家族が恋しくなるのでは」など激励を受けた。でも彼らは少し日本の家族が恋しいけれど、ベトナムの人々が(それ以上に)暖かくもてなしてくれる。

団長の思うに家族が恋しくならない理由として、彼らはこのTan Binh村が気に入って、だから多くのものを吸収したいのでしょう。ベトナムのことは(来る前)少ししか分らなかった。

このプログラムは2002年の2月から計画されており、参加者は出発前に在鹿児島の中高生から3日間ベトナム語の挨拶、生活などの講習を受ける。

Dong Nai省において昨年Nhon Trach地区で初めての鹿児島からのホームステイを受け入れた際、ステイが終わりお別れのときのこと(涙)を忘れることができない。昨年参加した人たちはその後もNhon Trach (Phu Hoi村)での短い滞在であったけれども忘れられずに、手紙などを交換して交流をしているのでしょう-- (Dong Nai省関係者の話)

団長はさいごに「私たちはもう一回この村にきます。私たちはこの村を忘れることはないでしょう」。

「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の概要

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

1 趣旨

鹿児島県の青少年を開発途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の体験や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともにホームステイや学校、施設などでの交流を通して相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。

また、派遣後は、これらの体験を報告会などを通して学校や地域に還元し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。

2 事業主体

主 催：「鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会」
青年海外協力隊鹿児島県OB会
鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
(財)鹿児島県国際交流協会

共 催：鹿児島県内の市町村

後 援：国際協力事業団九州国際センター、鹿児島県、鹿児島県教育委員会

3 派遣先

派遣国はアジア諸国を対象とする。

4 派遣者

参加者：県内各地から募集・選考した10～20名の中学生、高校生、専門学校生

同行者：実行委員会関係者と新聞社、テレビ局など報道関係者

共催市町村職員

5 実施時期

7月下旬～8月上旬の間の1週間程度

派遣の前後に事前研修会、報告会なども実施

8 経費

この事業の実施に要する経費は、実行委員会の構成団体、共催者（参加者に対する助成金による方法を含む）及び参加者が負担する。

第11回（平成14年度）「鹿児島県青少年国際協力体験事業」団員名簿

番号	氏名	性別	学 校 名	学年	推薦自治体
1	タケハラ ユカナ 竹 原 有佳菜	女	鹿児島女子高等学校	1年	鹿児島市
2	カミカワジ タイ ガ雅 上川路 太 雅	男	鹿児島玉龍高等学校	1年	鹿児島市
3	キシダ メグム 岸 田 萌	女	枕崎市立枕崎中学校	3年	枕 崎 市
4	モリ ダイ キ樹 森 大 樹	男	枕崎市立枕崎中学校	1年	枕 崎 市
5	ミヤシタ ジュン 宮 下 淳	男	枕崎市立枕崎中学校	1年	枕 崎 市
6	ミツドメ ミツ シ史 満 留 光 史	男	八代工業高等専門学校	1年	串木野市
7	マツモト ヤス ナ那 松 本 康 那	女	国分市立国分南中学校	3年	国 分 市
8	シバ ヒカリ 柴 ひかり	女	垂水市立垂水中学校	2年	垂 水 市
9	マツモト ケイ スケ 松 元 啓 祐	男	鹿児島県立加治木高等学校	1年	溝 辺 町
10	イトウ タクミ 伊 藤 沢 美	女	鹿児島県立加治木高等学校	2年	溝 辺 町
11	ウチムラ カリン 内 村 果 林	女	溝辺町立陵南中学校	1年	溝 辺 町

■同行者

1	アンラク ヒロシ 安 楽 大	男	青年海外協力隊鹿児島県OB会会長	団 長
2	オオサコ ヒロミ 大 迫 浩 美	女	(財)鹿児島県国際交流協会	
3	コウノ リエコ 河 野 理恵子	女	青年海外協力隊鹿児島県OB会	
4	ホンダ メグミ 本 田 恵	女	鹿児島テレビ放送株式会社	
5	タニグチ ヒロ タケ 谷 口 博 威	男	南日本新聞社	
6	ヒダカ ヨシ フミ 日 高 喜 文	男	枕崎市企画調整課	



ホントにこの夏は最高だった。

編集発行 鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会
〒892-0842
鹿児島市東千石町1番38号鹿児島商工会議所ビル11階
TEL099-239-7902
FAX099-225-3284